

バトン

幸せをかみしめて

6年 H・Sさん

私が「バトン」を読んで感じたことは、生きて人とつながれることの大切さと幸せです。

この物語は、三人の少年少女達がひな人形とタイサンボクを通して様々な思いにふれ、その思いがバトンとなって受けつがれていく物語です。

中でも私が深く考えさせられた場面は、イラン人のハッサンが帰って来たひな人形を嫌がるハッサンの母が、その理由と共に悲しい思い出をハッサンに話し、色々な思いをせおった人形がさらにイランの子供にひきつがれていく場面です。

ハッサンの母が話した、人形を嫌がる理由と悲しい思い出とは、イラン・イラク戦争で亡くなった人達を思い出すというものでした。ハッサンの母の話を読んだとき、私は現在も続くロシア・ウクライナ戦争を思い出しました。私はニュースで流れているこの戦争の映像を見たとき、戦争に対する恐れ、侵攻を続けるロシアへの怒りなど様々な感情がわきてきました。中でも一番感じたのは、人々の争いによって、何万何千もの人々に憎しみや恐怖を生み出してしまっていることの悲しさです。同じ人間同士なのになぜおたがいを傷つけあうのが疑問でした。ありませんでした。

映像だけでも私は様々な感情を抱きました。そんな戦争を実際に経験し、大切な友人や親ぞく、さらには大好きなおばさんを亡くしたハッサンの母はどんな気持ちだったのでしょうか。きつと一言では表せないほどの悲しみや何もできない自分に対する無力感やくやしさを、戦争に対する恐怖や怒りがあつたと思います。

私は実際に戦争を経験したことや家族や友人などを失ったことはありません。それでも戦争を知る手段はたくさんあります。知ったことをたくさんの人に伝え、あつてはならない戦争で苦しむ人々がいなくなる未来をつくりたいです。

そのために私にできることはどうあると思います。一つ目は、争いをして物事を解決するのではなく、話し合うことを日常的に心がけることです。二つ目は、日常にさりげなく存在しているが、実はあたりまえではない小さな「平和」を大切にし、守ろうとすることです。ご飯が食べれる、家族と話せる、勉強できる。そういう「平和」はなくてはならないものだからです。

この物語を読んで、私は世の中の平和があたりまえではなく、戦争などで苦しんでいる人が今もどこかにいることを強く感じました。そして、「平和」が日常にある私はずっと幸せであると感じました。私は、この幸せをかみしめて、平和の大切さをバトンのように受けつがせていける人間になりたいです。